

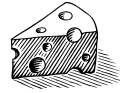
鼠は社に憑りて貴し



*Whenever man comes up with a better mousetrap, nature immediately comes up with a better mouse.*

人間がより強力なネズミ捕りを考える度に、自然はより賢いネズミを創る。

—James Carswell



天高く晴れ澄む秋の空の下、今日も穏やかに、山の里の、人の妖怪の信仰を集める守矢神社。

その住まいを兼ねた社務所の台所で、風祝の小さな悲鳴が響く。

「きやつ」

驚いて飛びのいた早苗の足元で、小さな灰色の塊が甲高い鳴き声をあげ、素早い動きで部屋の隅へと走り抜けてゆく。疾走する小さな影は、戸棚と壁の隙間の奥へするりと消えていった。

「びっくりした……。幻想郷にはやっぱりこういうのが居るんですね……」

壁に頬をくつつけて、ネズミの通り抜けていった狭い隙間を恐る恐る覗き込みながら、早苗はむうっと眉をひそめる。

「前は家の中でなんて見たことなかったのに。どこから入り込んだのかしら」

守矢神社は、湖を含む土地まるごと幻想郷にやってきた。ということとは少なくともネズミが入り込んだのは早苗たちが幻想郷にやって来てからだろう。

ゴミの処分や水道事情など、さまざまに状況が変わったとはいえ、はつきりその姿を目にしてみようとあまり気持ちのいいものではない。

「新参……じゃなくて、ネズミホイホイみたいなのはこつちには売ってない……わよねえ」

早苗が溜息混じりに苦笑していると、廊下の方から小さな姿が台所の入口に顔を出す。

「どうしたんだい早苗？」

「あ、諏訪子様。ネズミが出たんですよネズミ。台所に出るなんて始めて見ました」

「あー、そうかいネズミか。ここ十何年か見てなかったけど、気をつけなきゃねえ」

厄介そうに唇を真横に結ぶ諏訪子に、早苗はやや意外そうな表情になる。

「気をつけるって諏訪子様。たかがネズミですよ？」

「ネズミを舐めちゃいけないよ早苗。あれで雑食、なんでも食べるし群れば獐猛なんだから。赤ん坊の顔

やら指やらも平気で齧るし、悪い病氣も沢山持つてる。油断してると痛い目を見るよ?」

「そうなんですか? そういえばこの前会ったネズミの妖怪もそんなこと言ってたけど」

「あいつらは生命力旺盛だからねえ。二匹いれば一年後には二百七十六億匹に殖える。人間なんかあつという間に食べ尽くされちゃうよ?」

「うーん。ネコ型ロボットじゃあるまいし、そんなに過敏にならなくてもって気がしますけど……」

「あの妖怪、毘沙門天の使いなんだろう? 守矢神社の巫女とはそりゃ相性も悪いだろうさ」

「あ、神奈子」

ひょいと顔を覗かせたもうひと柱の神様が口を挟む。毘沙門天の化身と自称した戦国武将、上杉謙信のライバルの武田信玄は諏訪大社——建御名方神信仰を保護していたことでも有名である。

「もう、茶化さないでってば。冗談で言ってるんじゃないんだけぞなあ」

土着神の頂点として、諏訪子はネズミに対して別の見解を持っている。なにしろ南極以外の世界中に分布し、数千年にも渡って古く人と関わってきた獣だ。

外の世界ではそれでいいのかも知れないが、幻想郷

での流儀はまた違う。早苗ももうそれは十分に思い知っていると、諏訪子は思っていたのだが……

「うーん。気持ち悪いのは確かですね。でもそれならゴキブリのほうが嫌ですし。あ、そういえばこの前ゴキブリの妖怪も見たんですよ! 大きくてカサカサしてて、気持ち悪かったですよ!」

「いや、早苗。あれって蛍の妖怪じゃなかったっけ?」  
ああ怒られないといいなあと思いつつフォローに回る諏訪子。

「ともかく。小さいからってあまり軽く見るのはよくないよ早苗。慢心してると足元をすくわれる」

「そんな、大丈夫ですよ諏訪子様。もう私もすっかりこつちにも慣れましたし」

任せてくださいとばかりに、早苗はぽんと胸を叩いてみせる。

「前から言ってるようにですね、諏訪子様もあんまりあちこちふらふらせずに、ちゃんと神社で信仰を集めていてください」

「ん。早苗の言う通りだね。もうここは私だけの神社じゃない」

隣で神奈子もつともらしく相槌を打った。

そう言えばいつの間にか二人で信仰を得るように

なつたなあ、と諏訪子は思いつつも、それに納得できるわけもない。

「えー。そんなのつまんないってば」

「そういうのがよくないんです。格好はともかく、もう少し神様の威厳をもたないと、信仰は集まりませんよ。祟るのとかは私がやりますから！」

不満もあらわに頬を膨らませる諏訪子に、しかし早苗は御幣をひらひらと揺らし、自信たつぷりにこぶしを握る。

「いや、そうは言うけどね。神奈子もさ」

「あ、いけないもうこんな時間！ お買い物があるんですした！」

「あ、ちよつと早苗、話はまだ——」

「じゃあ神奈子様、諏訪子様、私ちよつと出てきますね！」

諏訪子が止める間もなく、早苗は慌ただしく勝手口に降りた。

「行つてきまーすっ」

「ああ、いつてらっしゃい」

とんとんと靴のかかとを直しながら、地を蹴つて、風を纏い空に舞い上がる早苗。

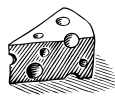
「おつと、こつちもお呼びだね」

拝殿の方で鈴が鳴らされ、神奈子も参拝客に応えるため廊下の奥へと引つ込んでゆく。

取り残された諏訪子は、所在無げにばたばたと手を振るばかりだ。

「ん……。だいじょうぶかなあ……」

空の彼方に小さくなつた風祝の背中を見送りながら、諏訪子はそうつぶやくのだった。



幻想郷では、遠出するか急いでいるときは、空を飛ぶものだ。それが当り前の日常になるまでには、人里まで買い物に行こうとする度についつい自転車をつ張り出してしまつたりしたが、それももう懐かしい話だ。

みるみるうちに小さくなる山の上の神社から、高度を保ちつつ里へと進路をとる。本日は天気晴朗にして

風穏やか。飛ぶには絶好の空模様だ。

巫女装束の袖をはためかせ、妖怪の山から落ちる河の大瀑布を右手に眺め、早苗は湖に注ぐ溪流に沿って飛んでゆく。

「~~~~~♪」

秋の陽射しは穏やかに、紅葉に染まる木々を揺らし、豊かな実りの気配を感じさせた。上機嫌で人里へ向かっていった早苗だったが――

「あれ？」

視界の端にちらりと移った、色づく秋の景色にはふさわしくない灰色の影に、早苗はふと眉をひそめる。身の丈ほどのダウジングロッドを操り、低空で溪流の周辺を移動するその姿は、さつき話に出たばかりのいつぞや出会ったネズミ妖怪のものだ。

「……ふむ」

ダウザーの小さな大将、ナズーリン。

命蓮寺の聖に仕える彼女は、探し物を探し当てる程度の能力を持つ。先日の宝船騒動の時は、なにやら宝物を探しているという言い分で、身のほどもわきまえず早苗に襲い掛かってきたが――

「あれだけ徹底的にやっつけてあげたのに、性懲りもなくまた現れるなんて。ネズミのくせに不屈きです

ね」

諏訪子はあんなことを言っていたが、相手はたかだかネズミの妖怪だ。遅れをとるはずがない、と早苗は思う。

それにここは守矢の神の治める神域。神様を信仰しているのならばともかく、そうではない妖怪の侵入をみだりに許していいわけがない。早苗は方向を変え、彼女を追いつがるようにその前に回りこむ。

「ちよっと、そのあなた！」

急に現れた風祝に、ナズーリンは軽く驚いたように瞬きをしたが、すぐに不敵に目を細めてロッドを下ろした。

「なんだい君、急に呼び止めて。山の巫女が私になんの用かな？」

「それはこちらのセリフです。妖怪がこんなところになんの用ですか？」

「……ほほう。まるで何をするにもいちいち君にお伺いを立てなければならぬような口ぶりだね。

幻想郷では妖怪が陽の下を歩いちゃいけないとは聞いていないけれどね。私は何もやましいことはしてないよ？」

「いいえ。問題大アリです。神を信仰しない妖怪は退

治しなければなりません」

びし、と言いつた早苗に、ナズーリンはしばし呆然とした後、やれやれと肩をすくめた。

「……はあ、まったくなんでこう、人間というのは杓子定規かね。神様びいきもいいが、御幣持ちも大概にしてみらいたいのだ」

「やましいことがないならちゃんと説明できるはずでしょう。十二支の一位になりたいがためにちやつかり牛に乗つてズルをするネズミは、何かよからぬことを企んでいるに決まっています」

早苗は取り出した御幣をくるくると回し、ナズーリンに向けて突きつけた。それに応じるように、風祝の周囲を巡る風が、より攻撃的に強く渦を巻く。

「妖怪退治は巫女のお仕事です。霊夢さんもこんなのを野放しにしておくから、信仰が集まらないのよ」

早苗の本気を感じ取ったか、ナズーリンもひゅーんと左右のロッドを交差させて構え直した。

「やれやれ。ネズミを舐めると死ぬよと言っていたはずだけど、まだよくわかっていないみたいだね」

「あら。反抗するんですね。やつぱりネズミには破壊願望とかあるのかしら？」

「なんだ君、まさかネズミの集団入水自殺なんてデマ

を信じてるのかい？」

「——この前のじゃ懲らしめ方が足りなかったみたいですね。いいでしょう、今度こそきちんと退治してあげます！」

弾幕勝負の口火を切ったのは早苗だった。風を纏つて振り抜いた御幣に従い、弾幕が溪流の上にばら撒かれる。

溪流の水面を波打たせ、轟と吹き荒れる風の弾幕。しかしそれを苦もなく避け、ナズーリンは先手必勝とばかりにスペルカードを宣言した。

「搜符『レアメタルディテクター』」

上下に構えたロッドから左右に放たれる二対の光線。しかし早苗は、悠然とその間に滑り込み、余裕たつぷりに微笑んでみせた。

「あら、いいんですか？ あなたのスペルカードなんて、2枚くらいしかないじゃないですか。所詮はネズミなんですわね」

しかもこの『レアメタルディテクター』、もう一枚の『ナズーリンペンデュラム』、どちらも早苗は攻略済みだ。

早苗は高らかにスペルカードの使用を宣言する。

「開海『海の割れる日』!!」

押し寄せるのは潮の香り。水飛沫を上げ白波を立てて出現した『海』が、早苗の振りおろした御幣に従ってスペル名の通り真つ二つに裂けた。

怒涛のような大海嘯が爆音を轟かせ、左右に伸び砕けて粒状弾を散らせるナズーリンの光線<sup>リザ</sup>を瞬く間に押し流す。

「ほら、ざつとこんなものです！」

「——いいのかな。そんな大技を緊急回避に使ってしまつて？」

「ご心配なく。私のスペカは5枚まであります！」

スペルカードの枚数<sup>自機&5面BOSS</sup>自体では一対一交換での相殺だが、早苗<sup>1面BOSS妖怪</sup>とナズーリンではそもそもデッキ手札の枚数からして圧倒的な戦力差がある。この程度で風祝の優位は揺らがない。

「これで——決まりです！」

「いやはや、せつかちな巫女だ。仕方がない、本気で行くとしようか」

迫る早苗の前に、ナズーリンは悠然とロッドを操る。それはさながら指揮棒を振るうコンダクター。それに導かれ、二重三重に戦列を組んだ通常弾幕が出現し、まるで突き進むネズミの群れのように——次々と早苗に襲い掛かった。

「何かと思えばただの通常弾幕じゃないですか。大きなことを言つてもう息切れですか？」

叫ぶ早苗に、ナズーリンはあくまで余裕を崩さない。「君のご指摘通り、私はさほどスペルカードを持つてゐるわけじゃないが、別に弾幕ごっこにそれしか使っちゃいけないわけではないだろう？ だから、こちらでお相手するよ」

「馬鹿にしないでください、こんなの簡単に——」

多少速度は速いが、真正面から飛んでくるだけの弾幕だ。回避するのはわけない。

迂回軌道を取り、戦列を組んで迫る楔弾幕の隙間を抜ける早苗に、ナズーリンは口元をふと緩め、ロッドの先端を向けた。

「そうだね。だから二段階ほど難易度を上げさせてもらったよ？ 頼豪阿闍梨<sup>わいごうあじり</sup>にあやかつて、鉄鼠<sup>てつそ</sup>が率いる、鉄の牙持<sup>てがもち</sup>つ八万四千匹の鼠の群れ。そうだね、高難度……いや、狂気<sup>ルナティック</sup>というところかな？」

「あ、……え？」

小さな賢將の指揮に従い、さらに次々と撃ち出される弾幕の列が、幾重にも重なつて出現。

先程までとは比べ物にならない速度で、楔弾は統制のとれた軍隊のように隊伍を組んで、続々と縦列突撃



を敢行する。

「奇跡を起こす程度の能力を持つて、自ら現人神と名乗るくらいの君だ。これくらいの弾に当たったところで、どの程度の被弾になるかわからないけれど。」

でも——だからといって、あまりネズミを甘く見ると、死ぬよ」

早苗が振り仰ぐ先、正面は密集する高速楔弾の戦列。左右に隙間は——ある。そこを抜ければ——だが、

（それじゃ間に合わないっ!?!）

「だめ、当たる——」

目の前に迫る弾幕の前に、早苗は反射的に目を閉じた。

刹那——

大気が軋むように収束し、閉じた目蓋の上からも分かるほどの強い光が、ぼつ、と視界の端に灯る。

次の瞬間、轟音と共に閃光が周囲を埋め尽くした。

蛙符『手管の蝦蟇』。

炸裂する光は、攻撃ではなく防御。緊急回避のため

のものだ。

スペルカード宣言と共に現れた諏訪子は、早苗を庇うように、ナズーリンとの間に割って入った。

「諏訪子様!？」

どうして、と言いかけた早苗の唇を、すつ、と人差し指で触れて制する諏訪子。

「ちよつと力みすぎだよ早苗。一手先の目の前だけじゃなく、もつと周りにも注意を払わなくちゃ。ネズミには気をつけるって言い聞かせてたつもりだったのになあ」

「……………それは、っ」

諏訪子に指摘され、唇を噛む早苗。

「言いそびれてたけどさ。ネズミは大黒さまや毘沙門天の使いっただけじゃなく、十二神将の宮毘羅大将の化身としても描かれる。遡れば金毘羅様、つまり梵天様だ。決して神格で劣るような相手じゃないんだよ。」

それにネズミは死を運ぶ凶獣でもある。お決まりの鼠毒<sup>そじく</sup>だけじゃない。ネズミ妖怪に噛まれれば猫だつて死ぬんだからね? 黒死病<sup>くせきびやう</sup>は<sup>やまいだれにネズミ</sup>。癡<sup>ち</sup>。って書くくらいなんだから」

そうして諏訪子は上空のナズーリンを見上げる。

「そつちもそつち。早苗が油断せず本気でやれば負け

とは思わないけど、いまのは遊びとは違うんじゃないかい？

妖怪が人間を殺す気でやるようだったら、余所の巫女も黙っちゃいないだろうに」

諏訪子の指差した先では、楔弾のひとつが命中した一抱えもあるような大岩が綺麗に撃ち抜かれている。改めて先程の弾幕の威力を思い知った早苗の背中を、冷たいものが滑り落ちる。

対するナズーリンは、諏訪子の神力に反応して振れるロッドを握り締め、やや緊張の面持ち。

「……あなたが山の上の神か。先日も力は感じられたが、姿を見るのはこれが初めてだね。思っていたのとだいぶ違う」

「よく言われるねえ」

ケロケロと笑い、諏訪子はぴょん、と手近な大岩の上に飛び乗った。

「子供の喧嘩に親が出るじゃあみつともないけど、相手が本気じゃ、私も黙っていられないかな」

「では、あなたが相手をしてくれると？」

「そんな、諏訪子様っ、私は——」

「ストップ早苗。あまりネズミだからって馬鹿にしちゃいけないといったつもりだけど？」

正論を言われ、早苗は押し黙る。

「叱ってるんじゃないよ？ 一寸の虫にも五分の魂。万物にも魂は宿る。どんな相手でも自分を高めることはできるからね。それはこんな遊びにだって言えることさ」

諏訪子はすっと袖中に手を隠し、ナズーリンを見上げた。

それを合図に、ナズーリンは無言のまま弾幕を再開する。たちまち視界を埋め尽くす榴弾の群れの中、諏訪子にはにんまりと微笑み、

「遊びなんだから、どうやって楽しくなるのかを考えるのも醍醐味だ。じゃあネズミを相手にしたときはどうすればいいか。やってみせるよ？」

とんと地面を蹴って宙に躍り上がった諏訪子は、ナズーリンの弾幕をするりと掻い潜り、手元にいくつかの光弾を並べた。

「たとえば、ネズミは壁際を通るのを好むからねえ。こう撃つたときはこう逃げる」

ナズーリンの視界を塞ぐ光線が放たれ、左手側に赤の混じった灰色の粒弾がはじけるように発生する。その弾の一群が、彼女の回避運動に反応してばらけ、散弾のようにその動きを制限する。

次の回避動作のためには高速で距離をとりたいたいナズーリンだが、ばらけた弾に阻まれてそれはうまく行かない。やむなく光線<sup>レーザー</sup>に沿って弾幕密度の薄い右手に逃げようとする。

「くっ!？」

そこに追い撃つように、光線<sup>レーザー</sup>が左から迸り、大きく空間を薙いだ。

上下の逃げ道も塞がれ、ナズーリンは機動を急制御手近な木の枝にロッドを引っ掛けて強引に急ブレーキをかけ、尻尾を翻しての切り返しを試みる。

「こうやって、驚かせたところに——こう、で詰み」「っ!？」

分裂する偶数弾が、狙いすましたかのごとくそのナズーリンを捕らえた。彼女の残るスペルカードは、まだ宣言を終えておらず、相殺には間に合わない。

掲げたロッドも囷の銀弾を捌くので精一杯。あえなく脇腹に被弾を許したダウザーの小さな大將は、水面にぶつかって大きな水柱をあげる。

「これで新スペルのアイディアが一丁上がり。

宝探しの大好きなネズミになぞらえれば、そうだね、

——異符『石見銀山ネコイラス』ってとこかな?」

「……………」

自分があれだけ追い詰められたナズーリンをあつさりとは留めてみせた諏訪子に、早苗は思わず声を上げていた。

「で、でも諏訪子様! そんな特定の相手を狙いうつみたいなスペル、いいんですか?」

「ま、初見殺しつてやつき。別にネズミに限ったことじゃない、いまの反射は大抵の相手なら引っ掛かるよ? ねえ?」

「く……………」

しぶとく溪流の水面ぎりぎりに踏みとどまっていたナズーリンを見下ろし、諏訪子は再度微笑む。

「じゃあネズミさん、もう一回行こうかな?」

「望むところだっ」

再度の諏訪子の宣言に応え、水柱を立たせ、ナズーリンは急角度で上昇。先ほどと同じ間合いで迫る諏訪子の拡散弾を真っ向迎え撃つ。

今度は回避機動をぎりぎりまで抑え、左右のロッドを慎重に操り、距離を測りながら低速で弾幕をひきつける。

「ここで落ち着いて——弾の拡散を防ぐ!」

ダウザーの小さな大將は拡散弾を最小限の機動で突破して、光線<sup>レーザー</sup>を掻い潜り、偶数弾の隙間を一気に突

き抜けた。

同時、ロッドを回転させると共に戦列を組ませた弾幕で諏訪子の陣地に突破口をこじ開ける。

「そこだ！」

足並みを揃え突撃する<sup>ルディック</sup>狂気の弾幕が、諏訪子の身体を捉えた。

「諏訪子さま!？」

が。ナズーリンの光弾が諏訪子の足を掠めたかに見えた瞬間、ぱん、と鋭い拍手が響く。

被弾を知らせる合図と共に、諏訪子は感心した様子で溪流の上に降りた。

「……いやいや、初見殺し狙いで組み立ててみたけど、まさか本当に2回目で破られるとは。やつぱりネズミは侮っちゃいけないね。さすが用心深い」

折角の新作スペルをあつさり打ち破られながら、あつからんと笑う諏訪子に、ナズーリンは薄く汗を滲ませ、口元を震わせた。

「……ダメだな、まるで効いてる気がしない。すつかり遊ばれてる気分だ」

「いやいや、これで互いに被弾は一機ずつ。そっちはスペルカードを温存したまま早苗とも被弾一対一だ。いい勝負じゃないかな？」

「言ってくれるね。余力が残っているのは分かっているよ」

諏訪子の力量はナズーリンも理解したのだろう。幾分気圧されながらも、なお彼女は引く様子もなく、ロッドを低く構えて、勝負続行に応じる気配を見せた。「心意気も大したもんだ。まあこのままだと勝負もはつきりしないし、決着をつけないとね」

とん、と水面を蹴って跳んだ諏訪子は、先刻ナズーリンが飛び乗った岩に再度足場を移し、早苗をさりげなく背中に庇う。背中越しに風祝に顔を向け、「<sup>初見殺し</sup>ネズミ捕りは有効に使えば役に立つけど、種が割れちゃこんなものさ。何度も通じるわけじゃない。

……やつぱり最後にものを言うのは、ね」

帽子の下で黒く澱む瞳を見開き、諏訪子は言う。

「——気合、さ」

刹那、

—— 崇符『ミシヤグジさま』。

ざあ、と巻き上げられた河の水が雨になつて降り注ぐ。スペルカードの応酬に溪流はすつかり姿を変え、流れもその向きを変えている。あとで河童が文句を言いに来ても言い逃れはできそうにない。

「……ふむ」

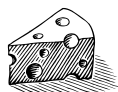
切り札のスペルが炸裂したその余波の中、対戦相手の気配が消えたことを確認し、諏訪子は上機嫌で腕組みをひとつ。

「あー、楽しかった。なかなか骨のある妖怪が居るもんだねえ」

「あの、諏訪子様……」

「なんだい早苗？」

『ミシヤグジさま』を避ける間もなく余波を受けて全身濡れねずみの早苗が、じつとりとした視線で諏訪



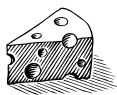
子を睨んでいた。

「今のは諏訪子さまも十分おとなげないと思いますけど……」

「いやいや早苗。やっぱ博麗の人外巫女相手とかならともかく、神様がそうそうしよっちゅう負けるわけには行かないでしょ」

「ひよつとして、単に諏訪子さまが暴れたかっただけじゃないんですか？」

神様の意図を計りかねてそう訪ねる早苗だが、諏訪子はあえて聞き流したか、返事はなかった。



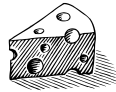
「——やれやれ」

早苗と諏訪子がそんなやり取りをしている中、溪流の遙か下流、ざばあつと岸に這い上がる濃灰の影ひとつ。

服のあちこちをぼろぼろにしたナズーリンは、文字通りの濡れネズミと化したさんたんたる有様の自分の格好を見下ろして溜息をこぼす。

「まったく付き合っていられないな。ネズミは互いの絆を試す実験動物じゃないというのに」

それにしても、ひどく時間を無駄遣いしたものだ——そう呟くと、小さなくしゃみと共に彼女は森の中に姿を消していった。



——後日。

博霊神社の境内にて、霊夢にびしりと御幣を突き付けて高らかに宣言する早苗の姿があった。

「さあ霊夢さん、勝負です！」

「……なんなのよ一体」

すでにテンションMAXの早苗に対し、いつもどお

り縁側でお茶を楽しんでいたところに脈絡なく勝負を挑まれた霊夢は面倒臭そうにあくびをしつつ、怪訝な顔で答える。

「勝負勝負って、あんたまで魔理沙の真似しなくてもいいじゃない」

「いえ！ 私は悟りました！ 相手が巫女だろうとネズミだろうとリグルだろうと、戦って全力を尽くします。それが神に相応しい力をつけるための一番の近道！ そう、獅子搏兔<sup>ししはつぱつ</sup>です!!」

「……いや、まあいいけど」

言っても聞きそうにないしねと後ろ頭をかきつつ、霊夢は早苗の勝負に応じる。

「先手必勝、行きますっ！」

颯爽と風をなびかせ、早苗は早速諏訪子直伝の初見殺しを叩き込まんとスperlカードを宣言。弾幕を繰り出した。まずは前方に拡散弾を広げ、続いて退路を塞ぐ光線<sup>レイザ</sup>を配置。

「そう！ ここで右に追い詰めたところを——って、いつの間にひだり？」

初見必殺のはずのフェイントが、霊夢を追い詰めたかに見えた瞬間。彼女の姿は通り抜けられるはずもない弾の隙間を抜けられて反対側にあった。

早苗があれ？ と表情を変えると同時に、  
「はい、これでおしまい」

スベル獲得の宣言とともに、高速で打ち込まれた  
誘導符がばしーんつ、といい具合の音を立てて  
風祝のおでこに張り付いていた。

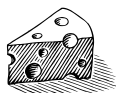
目を回しながら、ひるひるぼてり、と境内に落つこ  
ちた早苗は、仰向けになって大の字に転がる。

「人の動きじゃなあい……」

「だから何しに來たのよあんた」

呆れ顔の霊夢は、ますます不可解な顔をして、常識  
をあさつてのほうに放り投げ始めた守矢神社の巫女  
に首を傾げるばかりだった。

(了)





【あとがき】

はじめまして。そしてお久しぶりです。

お手にとつて頂きましてありがとうございます。銅おりはと申します。

ということ、『鼠は社に憑りて貴し』をお送りしました。早苗さん、ナズーリン、諏訪子さまを通じて弾幕ごつこのあり方などを語る、当サークル5冊目のSS本となります。

今回はストーリー作成に白身氏にご協力いただきまして、東方SSとして避けては通れない弾幕表現をうまく描写できないものかとあれこれ頭をひねって見たものとなりました。

まだまだ拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

繰り返しになりますが、今回の発行にはストーリー原案、監修として白身氏に多大なるご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

—— それでは。

また次の機会にお会いできることを願つて。

「<sup>ねずみ</sup>鼠は<sup>やしろう</sup>社に<sup>よ</sup>憑りて<sup>とつと</sup>貴し」

発行 平成21年10月25日

御射宮司祭

オルハザカサンパンチ  
折葉坂三番地

<sup>あかがね</sup>銅おりは

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>  
<http://members.jcom.home.ne.jp/orih/index.htm>



東方 project FanBook

発行：折葉坂三番地

H21.10.25